自治労連ちば
第574号
2021年9月21日
発行:自治労連千葉県本部
千葉市中央区長洲1-10-8 自治体福祉センター内
TEL 043-227-9393　FAX 043-227-6060
mail union@jichirorenchiba.jp
URL http://www.jichirorenchiba.jp/
責任者・竹内　敏昭　　編集長・實川　理

デルタ株の猛威

やってもやっても終わらない

限界を超える公務職場

新型コロナウイルスの感染者の急激な増大で、病院や保健所は大変な状況です。県内各組合から現場の様子をうかがいました。

匝瑳市民病院労働組合

要求してきた定期的PCR検査が実現

心身ともに疲労感マックス

コロナ病棟稼働中は、一般病床の夜勤ナースは1人体制です。私は、通常診療と救急対応等＋発熱外来をしています。長時間のPPE（防護服）着用や昼休憩が夕方になることもあります。

8月はあっという間に時が過ぎました。疲れが取れないまま休日が終わり、心も身体も疲労感マックスです。

緊張の毎日

先月、入院された患者さんからコロナ陽性が出ました。病棟スタッフと関わったスタッフ全員にPCR検査し、結果は全員陰性でした。院内感染とはなりませんでしたが、濃厚接触者の1人は毎日抗原検査で勤務、2人は14日間自宅待機となりました。

この影響で、数日間入院制限したり、新規コロナ患者の入院受け入れを停止しました。

都市部でなくても医療はひっ迫

千葉市や東葛地区の医療がひっ迫しているため、救急隊がこちらの方まで連絡してくる状態となっています。

コロナ病棟では当初、軽症患者を受け入れていましたが、近隣の旭中央病院のコロナ病床が満床となり、中等症で寝たきり状態の方も受け入れました。

先月は認知症で全介助が必要な高齢の患者さんが入院になりました。対応には、時間と人手がより多く必要となりました。

都市部でなくても、医療はひっ迫した状態であると思います。

組合で粘り強く要求

現在はコロナ病棟のスタッフは、家族への感染に配慮し、希望者はホテル通勤ができるようになっています。

また、組合で去年要求していた定期的なPCR検査が9月から実施となっています。

コロナで厳しい中でも、組合としてきちんと要求していくことが重要だと、あらためて感じています。

（匝瑳市民病院労働組合・鈴木さんより）

県本部　医療評議会から

身近な公立病院でも中等症患者受け入れ

県本部医療評議会のまとめでは、これまでコロナ感染者の受け入れを行っていなかった地域の公立病院でも、一般病棟を閉鎖してコロナ専用に切り替えるなどして、2～5床を確保し、中等症患者を受け入れるようになっています。

9月に入って状況はやや落ち着いてきていますが、今後、今回を上回る再拡大となった時、医療体制がどうなるのか心配されます。

アセモと戦った夏だった・・・

首相への手紙「コロナ禍　私が経験したこと」として医療現場から県本部に寄せられた声の一部（本人が公表「可」としたもの）を紹介します。

「コロナが流行し始めた頃、私は妊娠後期でした。看護師としてまだ働いていて、コロナ患者も入院していました。感染におびえながら仕事をし、検診のために受診することも怖かったです。（中略）

妊婦への配慮、医療従事者家族への配慮がないことに不安といらだちを感じました」

「この1年半、職場へ迷惑をかけないように、最小限の買い物以外は出かけないように気づかい、人との接触も避けています。仕事でもずっと気を張って仕事を行い、神経がすり減る思いが続いています」

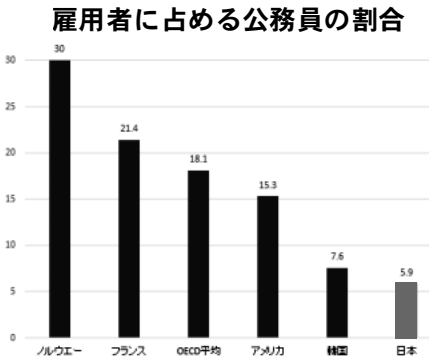
「これまでの職務の中で、N95マスク、ガウンなどを長時間身に着けたことがなかった。暑い中、着用して仕事をすると、とてつもなく汗が出て体力を消耗する。（中略）アセモと戦った夏だった」

平時がギリギリ

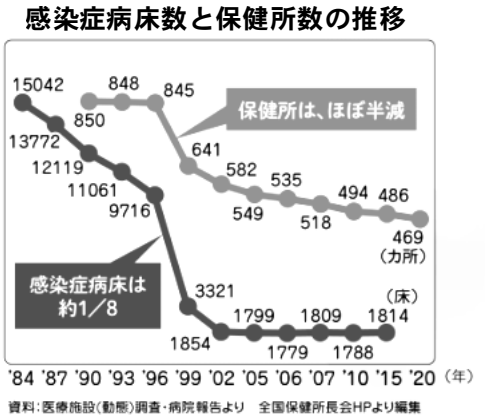
もともと少ない日本の公務員

日本の公務員数の総雇用者数に占める割合は、OECD（経済開発協力機構）の中で最低レベルです。【左図】

国際的には極めて公務員の少ない社会なのです。



各国2015年の総雇用者数に占める公務員（国家・地方公務員と公的部門職員）数の割合。日本は国家・地方公務員と独立行政法人や公法人等職員も含む。資料:OECD（Government at a Glance2017）



資料:医療施設（動態）調査・病院報告より　全国保健所長会HPより編集

船橋市役所職員労働組合

長時間勤務の連続で職員が疲弊

◆保健所◆午前2時まで残業も

中核市の船橋市には独自の保健所があります。市職労は、保健所へ簡易アンケート（ボイスカード）や聞き取り調査を行いました。

保健所では職員は切れ目なく電話対応をしています。電話では自宅療養を案内することが多く、強いストレスにさらされています。

また、人手不足のため、他部署から応援に来た人に対して仕事を教える人がいない・教える時間がとれないという状況があります。

「昨年暮れから1月にかけても忙しかったのですが、今はそれとは比較にならないくらいの状況」

「残業が夜中の2時まで続くこともあり、会計年度任用職員も22時ころまで残業している」といった声が寄せられました。

勤務体制の改善を求める

土日祝日もなく連続長時間勤務に疲弊している現場の様子を組合から職員課に伝え、改善を求めました。

8月末、ようやくこれまでの応援に加え、休館中の公民館等から50人規模の応援体制を組むことになりました。また、勤務を15パターンとし、それを組み合わせる交代勤務とすることで長時間残業を減らすという対応に変わりました。

応援に出した職場からも悲鳴

応援を送り出した職場からも悲鳴があがっています。

「コロナ本部ができる前からたくさん時間外の業務を行っているのに、『コロナ本部の方が大変』と言われて人が減らされて、気持ちの面でもつらい」

「コロナ本部に職員が異動となり補充がないまま1年以上経過している。現場の状況は伝えているが、改善される見通しが全くない」

「一人一人の業務量が過大となる状況が長期化し（中略）職員の疲弊は明らかである。人員配置の見直しや、人員補充を要望したい」

頑張るにも限度ある行革の再検討を

「災害時対応なのだからがんばれ」と言われても、人員不足の中で限界があります。

一方、船橋市は行財政改革の指針で「5年間正規職員を増やさない」「専門職を一般行政職にまわす」などの方針を示しています。

しかし、コロナ禍で現実に住民・職員の命がおびやかされていることを考えれば、行革方針には再検討が必要ではないでしょうか。

（船橋市職労・松山さんより）